建設フォーラム 第3回

震災体験から若者へのメッセージ

Message to the future

～いのちをみつめ 未来を創る君たちへ～

防災教育、キャリア教育及び建設リサイクル啓発授業を通じて、県内の工業高校生に建設業の役割を理解していただくフォーラム

◇主催者あいさつ

◇東日本大震災現場からの証言 1
「いのちと震災 ファインダー越しの 3.11」
岩手県写真家 佐藤 慧

◇東日本大震災現場からの証言 2
「その時建設業者はどう動いたか」
仙台市（株）深松組代表取締役社長　深松 努

◇若手建設技術者からのメッセージ～
●三和建設（株）代表取締役社長 石川忠之
●（株）渡辺組 工事部係長 矢野達也

◇特別授業「みんなで進めようかながわの建設リサイクル」
神奈川県県土整備局職員による出前授業

平成 25 年 12 月 12 日 木

開演時間　午後 1 時 30 分～午後 4 時

横浜市栄区民文化センター「リリスホール」

横浜市栄区小菅ケ谷 1-2-1

主催：一般社団法人神奈川県建設業協会　横浜市中区太田町2-22　TEL 045-201-8451

共催：（一社）全国建設業協会・（一財）建設業振興基金・東日本建設業保証（株）神奈川支店

後援：神奈川県・神奈川県教育委員会　　協力：県高等学校教科研究会工業部会建設工芸専門部

FUKAMATSU

神奈川新聞2013年12月13日掲載

基盤支える気概 熱く

県建設業協会 高校生対象にフォーラム

高齢化が進む一方で、若者離れが深刻さを増す建設業。こうした状況に危機感を抱いた県建設業協会（横浜市中区）は12日、県内の工業高校に通う生徒を対象としたフォーラムを同市栄区で開催した。東日本大震災の発生初期から復興作業に携わった仙台の業者らが講演。市民の生活基盤を下支えする建設業のやりがいを熱く語った。（田口　要）

復興作業を支えた仙台建設業協会幹部の話に耳を傾ける高校生ら
＝横浜市栄区民文化センター「リリス」

「家族や友人、神奈川県民を救えるのは、土木や建築を学んだ皆さんしかいない」。高校1、2年生239人を前に、仙台建設業協会副会長で、深松組（仙台市青葉区）の深松努社長（48）は声を一段と大きくして訴えた。

同協会は大震災発生直後から仙台市の復興を支えた。道路に散乱するがれきなどを脇によけ、自衛隊などとともに遺体を捜索。その後、道路脇、民有地、農地の順にがれきを撤去した。民有地では159の班をつくり、一斉に撤去を開始。深松社長は「被災者はみんな、『まずはうちのがれきを撤去してほしい』と願う。被災者の希望をかなえようと思った」と内情を打ち明けた。

さらに津波が押し寄せた水産加工会社が所有する冷凍倉庫の中で腐った魚を海洋投棄したことにも触れ、「建設業は、普段はあれこれ直す『開業医』。だが災害時は何でもこなす『救急救命医』だ」と説明。「自然災害が起きるのは日本の宿命。皆さんが入ってきてくれないと日本は守れない」と建設業の重要性を説いた。

建設業の若者離れは深刻だ。総務省の労働力調査によると、29歳以下の建設業の就業者は2012年で11・1％。全産業（16・6％）を大きく下回っている。県建設業協会は「『仕事が危険できつい』などの暗いイメージをもたれている」とみる。こうした現状を少しでも改善しようと、同協会は建設業の魅力ややりがいをPRするフォーラムの対象を初めて高校生にした。

フォーラムに参加した県立向の岡工業高校2年の古市兼人君（17）は「建設業は縁の下の力持ちだと実感した」と話し、県立藤沢工科高校2年の白幡真紀さん（17）は「今勉強していることが、さまざまなことに生かせることが理解できた」と話した。同協会は今後も若い世代を対象としたフォーラムを継続したい考えだ。

FUKAMATSU

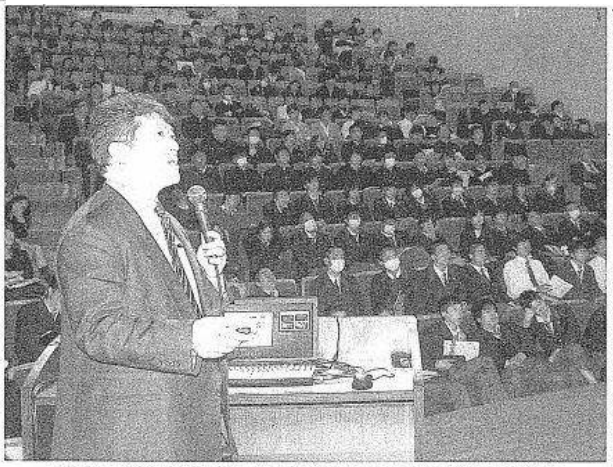
読売新聞2014年1月21日掲載

建設業「やりがい」PR

高校生に 講演や就業体験

県建設業協会（横浜市中区）が、高校生を対象とした講演会や就業体験に力を入れている。老朽化したインフラ（社会基盤）の改修が急務となる中、作業員らの高齢化や人手不足が深刻化しているためだ。同協会の担当者は「魅力ややりがいを積極的にPRして若い担い手を確保したい」としている。

（佐藤雄一）



高校生に建設業のやりがいを伝えようと企画された講演会（2013年12月12日、横浜市栄区の区民文化センターで）

「あの時は、何でもやった。誰かがやらないといけなかった」。建設・建築系の学科がある県内4工業高校の生徒ら約260人を集め、横浜市栄区で昨年12月に行われた講演会。仙台建設業協会の副会長が、東日本大震災後の復旧作業に従事した時のことを語り始めると、会場は静まりかえった。

被災地に入った作業員らは、壊れた道路の整備やがれき処理にとどまらず、行方不明者の捜索まで手伝ったという。

「関東で地震が起きたら誰がやるんですか。神奈川を救えるのは、土木と建築を学ぶ皆さんしかいない」。副会長の言葉に、うなずく生徒もいた。県立向の岡工業高2年の古市兼人さん(17)は「建設業は社会を支える、縁の下の力持ちだと改めて実感した」と語った。

講演会は、業界の高齢化と人手不足を背景に、県建設業協会が初めて開いた。国の統計によると、2011年度の就業者数は497万人で20年前から約2割減。29歳以下の割合は全体の1割弱に落ち込んでいる。大工や鉄筋工などの「職人」は、20年度に22万人、30年度には58万人足りなくなると見込まれている。

こうした中、同協会は、高校生らを受け入れる就業体験の仕組みを見直すことも決めた。従来は学校側が受け入れ先を探していたが、今後は会員企業にアンケート調査を行い、受け入れ可能な時期や体験内容をまとめ、学校側に提供する予定だ。学校への出前授業も積極的に行うことを検討している。

同協会の金沢晴男事業部長は「建設業界は3K（危険、汚い、きつい）と言われるが、労働環境は昔とは違い、やりがいのある仕事もたくさんある。高校生に魅力を知ってもらう機会を増やしていきたい」と話している。

FUKAMATSU